



巻頭言

教育課程の廃止こそ教育再生の出発点



葛西敬之 Yoshiyuki KASAI

東海旅客鉄道株式会社 (JR東海) 代表取締役会長

高等教育が実りあるものになるための条件は、初中等教育すなわち小中高等学校のうちにどれだけの基礎知識と裾野の広い教養を身につけるかにかかっている。教育の根幹は「学び」・「思い」・「行う」という3つの要素でバランスが取れた人材を育成することである。

その中でも肝要なのは「読み・書き・そろばん」を十分に学ぶことである。基礎知識の習得とは勉強すなわち詰め込みである。勉強することと楽しく学ぶことは概念矛盾以外の何ものでもない。「読み・書き・そろばん」を効率的に学ばせるためには教える側が十分な専門知識と熱意、健全なる身体、明朗なる精神を持っていることが大切である。

ところが現在の初中等教育における教員免許制度並びに教職課程の加重された負担が、これらの能力を有した優秀な人材が教員となる道を塞いでいる。それは専門学部の大学院で教育を受けた知識面で優秀な人間を差し置いて、教育学部出身者を教員として採用する教育閉鎖社会を守ろうとしているからにほかならない。十分な知識を持ち、それを伝える情熱を持った教員は、子供たちの知的好奇心を刺激し、意欲を向上させる。そのような教員が基礎知識を効率的に教えれば、子供たちはより短時間で必要十分な勉強ができる。非効率な公立学校教育により、子供たちは「思い」「行う」ための時間を奪われているのだ。

子供たちにとって、「思う」ということは自由な空想をめぐらせることである。人生のほとんどの時間をこれから生きる子供たちは、無限の可能性を持っている。その可能性の中で自分がどのような人生を歩むかについて空想をめぐらせることは楽しい夢であるだけでなく、重要かつ知的なゲームである。勉強を通じて身についた基礎学力により初めて子供たちは読書を楽しみ、空想の世界に遊ぶことが可能となる。そして、将来高等教育で何を学ぶか、いかに自由かつ創造的に生きるかが見えてくる。このように子供たちは勉強し、空想し、そして自らの意思において行動して人間社会に順応するための知恵を体得していく。初中等教育課程の子供たちにとって、「行う」ということは友達と交わり、遊ぶことである。その中で子供たちは将来社会人となったときに必要な人間学の原体験を習得する。

十分な専門知識や熱意のない教員と無駄なカリキュラムによって現在の初中等教育は、勉強における効率を著しく低下させ、子供たちの時間を奪っている。日本の高等教育が世界に誇りうるものであるためには、初中等教育が必要十分な知識を与え、かつ好奇心を喚起するものであることが不可欠である。それを阻んでいるのは、文科省を頂点とした公的初中等教育界であり、それらが利権の防壁としている教員免許制度並びに教職課程である。これらを改革することこそが喫緊の課題であると認識すべきである。

© 2009 The Chemical Society of Japan